

原爆文学研究会報

第二一九号

原爆文学研究会 二〇一〇年二月

貧者の核兵器 村上龍の小説『昭和歌謡大全集』（一九九四年）の結末部には「貧者の核兵器」という爆弾が登場する。イシハラを始めとする青年六人組と全員がミドリという名前を持つ中年女性六人組は、互いの武器をナイフから、拳銃、そしてロケットランチャーへとエスカレートさせながら死闘を繰り広げ、ついに「貧者の核兵器」を使用するにいたる。「貧者の核兵器」とは強力な燃料酸化爆弾であり、本物の核兵器ではない。したがって、この呼び名は「核兵器のような爆弾」という比喩に過ぎないのだが、その描かれ方は極めて原爆的である。

第一に、その武器が無差別の大量殺戮を目的として使われている点が原爆的である。イシハラ側とミドリ側の生き残りが二人対四人になり、報復を警戒したミドリたちがばらばらに行動するようになったとき、イシハラの耳に「テレビの中のドイツ兵」の叫び声が飛び込んでくる。「敵は丘全体に分散していて、位置がつかめません」。「バカ者、丘全体を吹き飛ばせ！」。この言葉に触発されたイシハラたちは「調布市を全部、吹き飛ばす」ことを思いつき、「原爆の造り方」を研究するようになる。敵を殺すために敵以外の人間も暮らす街ごと破壊するという発想は原爆のそれに近い。

第二に、その破壊が複数の場所における同時体験として語られている点が原爆的である。イシハラたちによる「貧者の核兵器」の投下が続いて、「ヘンミドリは」「トミヤマミドリは」「スズキミドリは」「タケウチミドリは」という順序で、自宅、並木道、ベランダ、地下駐車場におけるそれぞれの被爆体験が列記される。このような語り方は、例えば永井隆『長崎の鐘』（一九四九年）が「池本さんは」「古江さんは」「田川先生は」「加藤君は」という順序で、川平岳

道ノ尾、小ヶ倉国民学校、大山におけるそれぞれの被爆体験を列記したのに似ている。破壊を複数の場所における同時体験として描き、一個の爆弾の威力のすさまじさを浮かび上がらせるこの語り方は原爆のそれに近い。

原爆とは何か、という問いには様々な答え方があるだろうが、「街ごと」「同時に」殺し／殺されるといふ関係の独自性こそが原爆的な問題として問われねばならないのではないか。非原爆を原爆のように描くこの小説からそのような問いを得た。
(中野和典)

第二九回 原爆文学研究会報告

二〇〇九年一〇月三二日（土）九州大学西新プラザで開催した第二九回研究会には約一五名が参加。

ロベルタ氏の発表については「この小説はなぜ十四歳という年齢にこだわっているのか」「夕風の街と人と」や『地の群れ』等との類似点と相違点はどのように整理できるのか」等の質疑がありました。

山本氏の発表については「物理学者が文学者や哲学者の発言をどのように受容したのかも併せて考えた方が良いのではないか」「核エネルギー言説史において武谷三男をどのように再評価できるのか」等の質疑がありました。



◇ 研究発表 1

大野允子『ヒロシマの少女』論

— おとなになるとはどういうことか —

ロベルタ ティベリ
Roberta Tiberi

大野允子は一九五〇年代末から今日まで原爆を題材とする児童文学を書き続けている。特に、約三十冊の創作の中で広島県立第一高等女学校の一年六組の生徒日誌に基づいた作品が多いことはよく知られている。その陰で大野の二つ目の長編である『ヒロシマの少女』は今や忘却されつつある。しかし、雑誌『子どもの家』から独立し、児童文学の世界において自分を位置づけようとした頃に書かれたこの作品は、大野文学の「マニフェスト」とも言うべき重要性を持っており、以降の創作を読む上でも見逃せない論点を持つ作品である。

大野允子は、登場人物が成長・変化する契機として原爆の問題を描いており、読者も追体験を通じて成長しうるものになっている。そして、安易な解決法を示さずに様々な視点から原爆の問題を提示することによって、読者が自分自身で原爆のことを考えられるようになることを促す。この点は、大野の特徴であり、特に『ヒロシマの少女』に最も端的に表れている。

『ヒロシマの少女』は一九六九年五月に盛光社の「長編創作シリーズ」の一冊として出版され、原爆児童文学において初めて原爆の問題と未解放部落の問題とを関連づけた。『ヒロシマの少女』を読み解く鍵は「はじめに」にある。そこで大野は児童文学にとって最も重要な問題の一つである「おとなになるとはどういうことか」とい

う問いを読者に投げかける。そして、「大人になる＝ものを知る」という見解を示し、続いて「ものを知る＝本当のヒロシマを見つけ出す」という見解を示すことによって、思春期という普遍的な問題と原爆との接続を図っている。

『ヒロシマの少女』において、原爆や差別と「大人になる」ことの接点は「オレンジ色」というモチーフによって示されている。「オレンジ色」は、光江のセーターの色であり、ニールックのマネキンの色であり、ピカの光であり、「自分のために咲く」マリーゴールドの色であるがゆえに、自分にとって価値ある生き方をすべしという人生観の象徴になる。原爆で亡くなった人とは異なり、生き残った人にとっては原爆が新たな人生の要素になる（なってしまう）。「新たな人生」は、自分の人生の主になることによって始まる。

大野は『ヒロシマの少女』において物事の「ほんとう」の姿を自ら探ろうとする姿勢の重要性を描いているのである。そのためには自ら日常的な生活を離れ、世間的な見方を離れることによって自分の視点をずらし、物事の新たな側面に出会うことが必要になる。

戦時中、「正義」の戦いのために勝利を信じて働いた大野は戦争の協力者としての責任を感じている。しかし、それは日本国民としての戦争責任ではなく、あくまで個人としての責任である。そして、大野にとっては個人としての戦争責任を負うということは、自分の作品を通じて様々なことに疑問を抱き、自らその疑問にアプローチできるような人間を育てるということである。

◇ 研究発表2

核エネルギー言説の戦後史

〈原子核物理学者の言説を中心に〉

山本 昭宏

我々は、原爆文学の書き手たちが核エネルギーに対してどのような態度を取っていたのかについてはある程度知っているが、原子核物理学者たちがどのような態度を取り、何を語ったのかについては、ほとんど知らないのではないだろうか。戦後は、戦前に増して原子核物理学者の発言が影響力を持った時代であったにも関わらず、これまで彼等の核エネルギー言説は重視されてこなかった。本報告の目的は戦後の原子核物理学者の言説分析を通して、彼らが語った核エネルギー像の変遷を明らかにすることである。

本報告では、原爆投下から第五福竜丸事件が起こる一九五四年三月までを扱う。第五福竜丸事件の周辺までの間に、科学者による核エネルギー観についてのおおよそのケースが出そろっていると考えられるからである。

本報告が対象とするのは仁科芳雄、湯川秀樹、武谷三男の三名である。原子核物理学者の戦後の言説は、武谷三男を軸にすることでおおよその流れと傾向が掴めると考えるが、イデオログとしての側面もある武谷にこの時期の原子核物理学者を代表させるわけにはいかない。より多面的に言説空間を捉え、そこから立ち上がる傾向を捉えるため、戦後を代表する物理学者であり、執筆や発言の機会が多かった仁科と湯川を加えることとする。

戦後、少なくともソ連の原爆保有が明らかになった一九四九年まで、原子爆弾は「戦争抑制者」「恩恵」「希望」として語られた。これは既に長野秀樹が「科学としての原爆」(『原爆文学研究』第五号二〇〇六年一〇月)において指摘していたことでもある。占領前期における、仁科、湯川、武谷の文章をみることで、まずは長野の論を補強できたように思われる。

しかし、問題は「恩恵」や「希望」を前面に出した核エネルギーの語りが、どのように変化していくかである。

ソ連の原爆保有に端を発する国際関係の緊張を背景として、「原子爆弾による平和」を疑う視点が登場する。再び科学が戦争と結びつくことへの危惧から、原子力研究の方向性に関する議論が日本学術会議においてなされたのである。

我々は戦後の核エネルギー言説を画するものとして第五福竜丸事件を位置づけることが多いが、原子核物理学者の間で「原子爆弾による平和」を疑う視点が表れるのは、その第五福竜丸事件よりも前だったと考えてよい。

今回の報告では便宜上、原子核物理学者に対象を絞った。報告当日にご指摘いただいたことでもあるが、本来「言説」とは、「文学者の言説」や「科学者の言説」というように、明確に区分できるものではない。仮にも言説研究を謳うのであれば、様々な分野の議論から立ちあがってくる像を捉えるべきなのは当然である。そのダイナミズムこそが言説研究の醍醐味であるはずだから。しかし、そのための具体的な方法について、これだと言いつけるものを持ち合わせないのが現状である。ともあれ、質疑応答の席では今後の研究の方向性について多大なる御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

彙報

第二九回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇九年一〇月三十一日(土) 一四時より
- 会場 九州大学西新プラザ中会議室
- 研究発表

大野允子『ヒロシマの少女』論

——おとなになるとはどういうことか——

ロベルタ ティベリ
Roberta Tiberi

核エネルギー言説の戦後史

→原子核物理学者の言説を中心に→

山本 昭宏

日本社会文学会との共催について

昨年よりご相談しておりました日本社会文学会との共催について中間報告をいたします。これは日本社会文学会の二〇一〇年度秋季大会と原爆文学研究会の第三二回研究会を共催で行うというものです。現在、日本社会文学会の運営委員と原爆文学研究会事務局で協議を重ねながら準備を進めています。会の規模や運営方法等が異なるため、今後さまざまな調整が必要となりますが、それぞれの参加者が問題意識や知識を持ち寄って生産的な討議ができる場を作りたいと考えています。原爆文学研究会会員の皆さまにもご協力方お願い申し上げます。現時点でご報告できることは次の通りです。

- 日時 二〇一〇年一〇月二日(土)午後・三日(日)午前
- 会場 広島大学東広島キャンパス学生学生会館
- テーマ 「原爆体験と表象／文学」(仮)

○会次第

- 一日目(午後) 研究発表×四本 講演
- 二日目(午前) シンポジウム

※ 研究発表は原爆文学研究会から二名、日本社会文学会から二名。コメンテーターによるコメント+全体討議を行います。

※ 研究発表者を募集します。発表希望者はタイトルと四〇〇字の要旨を添えて、事務局までお申し込みください。希望者多数の場合は事務局で調整します。正式決定は六月末になります。

※ コメントは互いに異なる会員によるものとします。日本社会文学側の発表者が決まり次第、原爆文学研究会側のコメンテーターについて事務局から会員に個別に相談します。

※ シンポジウムのパネラーはシンポのテーマが決まり次第、事務局から会員に個別に相談します。

(ご意見ご質問等ございましたら、事務局までご連絡ください)

編集後記 第三二回研究会(二〇一〇年六月開催予定)の研究発表者も募集中です。ふるってご応募ください。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀲剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>